

保護者・地域住民との連携・協働による 児童への効果的な学習支援の在り方

—児童の学ぶ意欲の向上を目指した取組を通して—

長期研修員 仲 川 道 興

Nakagawa Michioki

要 旨

児童の学ぶ意欲を高める方法の一つに、保護者や地域住民等との連携・協働による学習支援があげられる。本研究では、小学校第3学年の総合的な学習の時間を中心に、保護者等の学習参加や地域の人材活用による学習支援プログラムの開発と実践を行った結果、児童の学ぶ意欲の向上が明らかになった。

キーワード： 学習支援プログラム、保護者・地域住民との連携・協働、学ぶ意欲の向上

1 はじめに

学校と保護者・地域住民等との連携・協働の大切さが叫ばれる今日、学校外の人々との連携・協働による取組が全国各地で進められている。その結果、学校と保護者・地域住民等との連携・協働の枠組みは徐々に整備され、小学校を中心に、校内美化や園芸・栽培活動、地域での見守り活動等、学習時間外の活動を中心に成果が報告されている。

一方、学習活動での保護者・地域住民等との連携・協働については、学習時間外の活動と比べて少なく、各学校でよりよい方法が模索されている。その際、「保護者等にどのような形で学習に関わってもらっていいのかが分からない」、「保護者等の積極的な学習参加によって、児童の個人情報^{えい}が漏洩^{えい}しないか心配」等、教職員の中から保護者・地域住民等の学習参加及び学習支援の導入に躊躇^{ちゆうちゆう}する声が聞かれることもある。

県北西部の大規模校であるA小学校（以下「調査対象校」という。）では、生活科の「まちたんけん」での見守り活動、家庭科のミシンや郷土料理の実習等で、近年、保護者・地域住民等による学習支援が行われるようになってきた。一方、調査対象校児童の学習状況として、平成25年度の「全国学力・学習状況調査」における知識・理解面での平均正答率は全国のそれを上回るが、関心・意欲・態度面において、自分の考えや獲得した知識を相手に分かりやすく伝えたり、積極的に相手とコミュニケーションを図ったりすることには課題があり、改善を要する。

地域との連携や地域の教育力の活用について、『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』（2008）では、「学習活動を地域の中で行ったり、その成果を保護者も含めた地域の人々に公開することにより、児童が社会の一員であることを自覚したり、児童の学習意欲が向上したりすることになる。」とその意義を述べ、児童の学ぶ意欲の向上についての効果にも言及している。

そこで、本研究では、地域の教育力を活用した学校と保護者・地域住民との連携・協働の方法を探ることで、調査対象校児童の学ぶ意欲の向上につなげようとした。

2 研究目的

本研究では、以下に示す研究仮説のもと、調査対象校児童の学ぶ意欲の向上を明らかにすることを目的とする。

研究仮説： 保護者・地域住民との連携・協働による効果的な学習支援プログラムを開発・実践することにより、児童の学ぶ意欲を向上させることができる。

3 研究方法

- (1) 学校と家庭・地域との連携・協働による学習支援の取組に関する先行研究の調査
- (2) 学習支援プログラムの開発及び実践
- (3) 質問紙調査（事前・事後）の実施と振り返りカードの活用
- (4) 授業の非参与観察
- (5) 質問紙調査、振り返りカード、授業の非参与観察等の調査結果の分析と考察

4 研究内容

(1) 学校と家庭・地域との連携・協働による学習支援の取組に関する先行研究の調査

ア 学びの共同体、保護者の学習参加の取組…神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校の事例

浜之郷小学校は、「学びの共同体としての学校創造」の方策の一つとして、学校外の人々とのネットワークを核とした「学習参加」の取組を、国語科・算数科・社会科・家庭科等で行っている。『学校を創る－茅ヶ崎市浜之郷小学校の誕生と実践－』（大瀬・佐藤、2000）における福谷の記述によると、学校外の人々による学習参加の取組について、「子どもたちは、教師だけでなく、保護者や地域の人々、研究者等との多くの出会いと対話が組織された様々な学習を通して、社会的な関わりを学校内で体験をしている。」と報告がある。

さらに、清水（2012）は、浜之郷小学校における保護者の学習参加の取組を、『保護者の学習参加』を通して、子どもと親ではない他の保護者とのコミュニケーションが生じること、学習が生活と結びつき、家庭において子どもたちの学びが共有される様子が描き出されている。」と報告し、『保護者の学校参加』については、学校運営への参加だけではなく教育活動への参加に関しても射程に入れて論じることが必要である。」としている。

また、浜之郷小学校における学習参加の形態について、福谷は、協力者の関わり方から①教科指導支援型（個別指導、グループ指導、学習参観）、②付き添い型（見学、取材、遠足）、③選択学習型（個別テーマの追究）、④長期継続型、⑤ワンショット型の5つに分類している。

本研究では、上記の福谷の分類による①教科指導支援型の内容と、⑤ワンショット型の期間に着目して学習支援プログラムを開発し、調査対象校において実践する。なお、⑤ワンショット型とは、保護者等の学習参加及び学習支援を得る期間を、短期間あるいは一単元に限定した形と捉える。

イ コミュニティ・スクールの取組…東京都三鷹市、福岡県春日市の事例

東京都三鷹市では、各中学校区で一貫教育のコミュニティ・スクールを組織し、中学校区毎に「〇〇学園」と名付け、小・中学校と保護者・地域住民等とが一体化して、地域全体で教育を推し進めようとする雰囲気づくりに取り組んでいる。三鷹第四小学校では、保護者・地域住民等からなる「コミュニティ・ティーチャー」や「スタディ・アドバイザー」が学習支援を行っている。貝ノ瀬（2010）は、「保護者や地域のサポート隊も含めて多くの大人に育てられていることが、子ども

たちに安心感を与え、生活態度の安定や学習意欲の向上へとつながっています。」とその成果を報告している。また、福岡県春日市では、保護者・地域住民等による「サンライズティーチャー」と呼ばれる野菜作り指導等の支援や、「いきいき先生」と呼ばれる校外学習の付き添い、跳び箱運動やマット運動の補助等の学習支援が日常的に行われており、山本（2011）は、これらの取組の成果について、「これは、学校力と家庭力と地域力を相乗的に高めていきます。加えて、連携・協働のまちづくりにもつながっていることが見えてきました。」と述べている。

以上の点を踏まえ、東京都三鷹市及び福岡県春日市の小学校における総合的な学習の時間を中心とした取組を、本研究における具体的な学習参加及び学習支援のモデルとして参考にした。

(2) 児童の学ぶ意欲の向上を目指した学習支援プログラムの開発及び実践

ア 学習支援プログラムの概要

自分たちの住む地域の魅力を、保護者の支援を得て地域の人から学ぶことは、児童の学ぶ意欲の向上に有効であると考えます。本研究において児童の学ぶ意欲の向上した姿を①「やる気をもって学ぶこと」、②「学んだことを相手に分かりやすく伝えようとする事」、③「より主体的に学習に取り組もうとする事」と捉え、学習支援プログラムの開発と実践を行った。その際、「地域教材を生かした学習活動」、「保護者等の学習参加及び学習支援」、「地域人材の学習支援」の3要素をプログラム構成の柱とした。また、保護者や地域人材等による支援を受ける学習活動を発展的に「Stage 1 みつめる」、「Stage 2 わかる」、「Stage 3 ひろげる」の3段階に区分した。学習支援プログラムの概要を図1に、詳細を資料1に示す。なお、図1中の右下に示した丸囲み数字は、ステージ毎の各授業回における授業時間数を表し、白抜き数字は、保護者等の学習参加及び学習支援を得た時間数を表す。

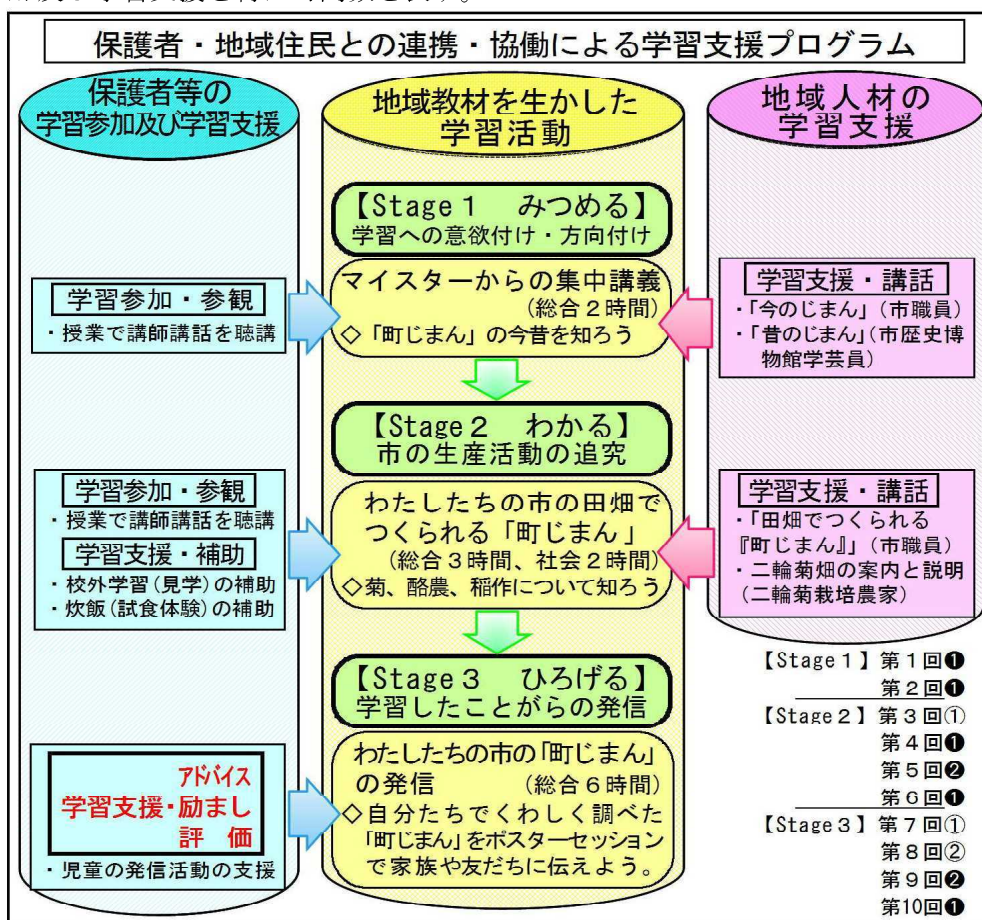


図1 学習支援プログラムの概要

(7) 地域教材を生かした学習活動

児童や保護者が生活の舞台とする地域には教材となり得る学習素材が数多く存在する。それらは、生産活動であったり歴史的な文化遺産であったり、また、自然や風土、あるいは伝統文化であったりと様々であるが、自分たちの住む地域の特徴が他地域の特徴と共通し、一般化できるものもある。また、地域教材の活用の利点として、児童にとって調査対象が身近ですぐに調査が可能なことや何度も繰り返し調査できること、保護者等にとっては学習参加及び学習支援を通して地域の魅力を再発見できること等が挙げられる。これらのことから、地域教材の活用は児童の学ぶ意欲の向上を目指す上で有効であるとともに、児童の郷土愛の醸成にもつながっていくものと考えられる。

(4) 保護者等の学習参加及び学習支援

従来行われてきた、保護者の学習参加としての参観や、学習支援としての付き添い・見守りとともに、今回、新たな学習支援としてアドバイス・励まし・評価（以下「新学習支援」という。）を加えた。保護者等による新学習支援の方法としては、口頭での支援の他に、保護者用の学習感想カード（以下「保護者振り返りカード」という。）を記入してもらい、学級担任が次時の学習の冒頭に児童の励みとなる保護者からの記述を紹介する。さらに、児童の発表に対する評価カード（以下「発表評価カード」という。）も保護者等に記入してもらい、児童の発表の工夫を支援すること等を通して、児童の学ぶ意欲や表現力・発信力の向上につなげる。

特に、Stage 3の段階となる発表の工夫の時間（以下「第9回」という。）や、休日参観での町じまん発表会（以下「第10回」という。）において、具体的なアドバイス・励まし・評価をお願いした。このように、保護者からの新学習支援を設定することにより、児童は、普段の学習の場では接することの少ない保護者からの支援を励みとして意欲的に学習に取り組むと考えられる。さらには、保護者側も、学校の教育活動への理解が深まるとともに、児童の支援者としての存在意義を意識する機会となると考える。

なお、保護者等への学習参加及び学習支援の依頼は、学校からの文書によって希望者を募る形で行った。学習支援内容の連絡は、総合的な学習の時間の保護者向け通信を発行し周知した。また、保護者に対し、総合的な学習の時間の児童の学びについての情報提供を積極的に行った。

(7) 地域人材の学習支援

地域の専門家から自分たちが住む地域の魅力を教わることを通して、児童が地域の新たなよさを発見するとともに、地域への理解を深めることができる。また、地域で活躍する専門家の姿を通して、将来の自分の姿を思い描こうとするキャリア教育の視点からも有意義な学習だと言える。地域人材としてのゲストティーチャーは、調査対象校が作成した「学校サポート人材バンク」の中から、地域の特徴的な生産活動に中心的に携わったり、日本一、奈良県一などの「町じまん」を詳しく語ったりできる人を選考し、学習支援を依頼した。その際、学習計画や指導案、講話内容等について、学習の前後で打合せと反省の場を設定した。事前の打合せは指導内容についての詳細の確認とともに、意志疎通を図る中で児童の学ぶ意欲の向上に向けた相互理解や目的・情報共有の場とした。また、授業の反省の場では、児童や保護者の振り返りカードの内容確認とともに、指導について率直な意見交換を行い、今後のより充実した学習支援に向けた検証の機会とした。

イ 学習支援プログラムの効果検証について

本学習支援プログラムでの地域人材の活用は、総合的な学習の時間を中心とした地域教材を用

いた学習を充実させるねらいがある。また、保護者等による学習参加及び学習支援は、児童の学ぶ様子を把握するとともに、児童の理解者・支援者としてよき関係を築くという意味がある。

そこで、本学習支援プログラムの効果を検証するために、地域人材の活用による学習支援や、保護者等の学習参加及び学習支援が、児童にとって有効であるかを確認する必要がある。

その方法として、市川（2001）の「学習動機の二要因モデル」（以下「市川モデル」という。）を用いることとした（図2）。この市川モデルとは、市川が6つの種類に分類した学習動機を構造化した一つの例で、横軸は学習によって直接的に得られる報酬をどの程度期待しているか（功利性）を表し、縦軸は学習内容そのものをどの程度重視しているかを示している。

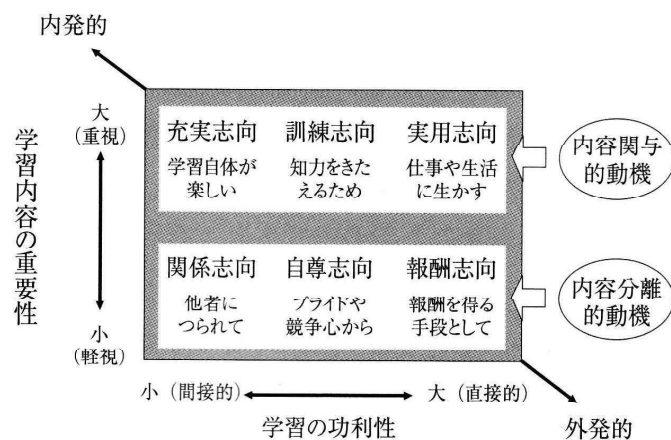


図2 学習動機の二要因モデル
「学力と学習支援の心理学」市川（2014）から転載

本研究では、児童が「やる気をもって学ぶこと」、「学んだことを相手に分かりやすく伝えようとする」と等を目指していることから、市川モデルの内容関与的動機のうち「充実志向」、また、内容分離的動機のうち「関係志向」に着目して質問紙を作成し、学習支援プログラム実践の前後にこの質問紙を用いた調査を行い、児童の学ぶ意欲の高まりや意識の変容を把握しようとした。

なお、本研究における「充実志向」に関わる学習内容として、地域人材であるゲストティーチャーによる調査対象校の校区内の歴史、事物、生産活動についての講話等、地域教材に関する項目とした。また、「関係志向」に関わる構成者として、教員や児童に加え、学習支援プログラムで学習参加及び学習支援を行う保護者・地域住民等の身近な大人を設定した。

(3) 質問紙調査（事前・事後）の実施と振り返りカード等の活用

ア 質問紙調査の実施（事前・事後）

(7) 質問紙調査のねらい

調査対象校における保護者・地域住民との連携・協働による学習支援プログラムの効果を検証するため、学習支援プログラムの取組の事前・事後に質問紙調査を実施し、児童の学ぶ意欲や学習に対する意識の変容を把握する。

(1) 質問紙調査の実施とその内容

a 実施日と対象児童

事前調査… 8月28日実施 調査対象校第3学年児童94名
事後調査… 11月5日実施 調査対象校第3学年児童94名

b 質問紙調査の内容

「学ぶ意欲に関わるもの（16項目16問）」、「学習規範に関わるもの（3項目3問）」、「学習方法に関わるもの（1項目7問）」からなる全20項目26問の質問紙を作成し、4件法により問うこととした（資料2参照）。学ぶ意欲に関わる質問項目のうち、4問を市川モデルにおける「充実志向」に関わる項目、8問を同「関係志向」に関わる項目として設定し、質問紙調査結果の考察に活用した（表1）。

表1 「充実志向」、「関係志向」に関わる質問

	No.	質問紙調査問題
充 実 志 向	(1)	学校での勉強は好きですか。
	(11)	地いき(市や校区)のことをくわしく勉強したいと思いますか。
	(12)	今すんでいる地いきのまつりや行事に、すすんで参加したいと思いますか。
	(20)	学校で勉強した地いきのことで、ほかの学校の人に自まんしてみたいことはありますか。
関 係 志 向	(5)	学校で勉強したことを家でよく話しますか。
	(13)	おうちの人や地いきの人といっしょに勉強したいと思いますか。
	(14)	おうちの人や地いきの人は、あなたといっしょに勉強したがついていると思いますか。
	(15)	おうちの人や地いきの人に、あなたが学校でがんばっているようすを見てほしいと思いますか。
	(16)	発表の時、みんなにとどく大きな声で発表していますか。
	(17)	発表の時、自分の考えを分かりやすくみんなにつたえようと気をつけて話していますか。
	(18)	先生や友だちの発表をしっかりと聞き取ろうとしていますか。
	(19)	がんばっている友だちをおうえんしたいと思いますか。

イ 振り返りカードと発表評価カードの活用

(7) 振り返りカード

全10回の授業毎に、児童及び保護者・指導者からの振り返りカードの記録を蓄積し、考察の資料とした。児童用の学習感想カードである「今日のがんばりカード」(以下「児童振り返りカード」という。)(図3)は、4件法による授業に対する自己評価と記述によるその理由、分かったことや印象に残ったこと、さらに、活躍した友人に対する相互評価欄を設けた。

3年 組 番 名前[]

今日のがんばりカード		2014. 9.11 (木)								
今日のめあて 市や校区の今のすてきをみつけよう。										
しっかりがんばったかな? (赤で↓をつけよう) <table style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="text-align: center;">よくできた</td> <td style="text-align: center;">できた</td> <td style="text-align: center;">あまりできなかった</td> <td style="text-align: center;">できなかった</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">◎</td> <td style="text-align: center;">○</td> <td style="text-align: center;">△</td> <td style="text-align: center;">×</td> </tr> </table>			よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった	◎	○	△	×
よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった							
◎	○	△	×							
そこにしるしをつけたりゆう										
今日の学習でわかったことや、わびのこったこと										
今日のキラリ! さん(活やくをしたと思う人)	さん									

図3 児童振り返りカード

保護者振り返りカードは、児童振り返りカードの内容に準ずるが、相互評価欄に替えて「子どもたちの様子で気付かれたことは?」という欄を設け、児童の行動や、活躍、気付き、つぶやき等をより詳細に把握するように努めた。

(4) 発表評価カード

第9回と第10回において、児童の発表に対するアドバイス・励まし・評価を、学習支援の保護者から口頭で言葉掛けをしてもらうとともに、発表評価カードとして、直接、児童に渡してくれるよう依頼した。発表内容が聞き手により分かりやすく伝わるよう、保護者等からの率直な声を得ることを意図したものである。①ポスターの見やすさ、②声の大きさ・落ち着き、③発表の分かりやすさ、④聞き手の理解・満足度の4項目について◎、○、△で評価してもらい、後の分析では、◎3点、○2点、△1点に点数化した。併せて、よかった点と改善すべき点をカードに記述してもらい、記述内容については、考察の際の補助資料とした。

(4) 授業の非参与観察

ア 筆者が参観した際の観察

まず、非参与観察の対象となる児童を特定するため、事前の質問紙調査や振り返りカードの記述を基に、①学習に対して意欲的な児童、②学力は備わるが質問紙調査で学ぶ意欲が低位にある児童、③学力や学ぶ意欲がともに低位にある児童等を抽出した。これら3群の児童の表情や行動、発言等について、フィールドノートを用いて記録するとともに、ビデオカメラ、デジタルカメラ、ICレコーダ等を用いて電磁的な記録も併せて行った。なお、非参与観察に当たっては、機器使用も含め、調査対象校の学校長及び当該学年担任の許可を得た上で実施し、児童の個人情報

の保護に細心の注意を払うことや、非参与の観察者として授業の進行には直接的に関与しないこと等に留意した。

イ 筆者が非参観の際の観察

1台のビデオカメラで教室前方右隅から定点での撮影を行った。主に授業記録として指導者や児童の発言の記録の整理に活用した。

5 調査結果の分析と考察

(1) 質問紙調査の結果から

本学習支援プログラム実践の事前・事後の質問紙調査における全質問項目の回答割合、平均値及びt検定結果を一覧にしたものが資料3である。平均値算出の得点化に当たっては、「当てはまる」を4点、「どちらかといえば当てはまる」を3点、「どちらかといえば当てはまらない」を2点、「当てはまらない」を1点とした。表1に示した「充実志向」に関する4項目、「関係志向」に関する8項目のt検定結果のうち、「関係志向」の3項目について以下のように有意差が認められた(表2)。

表2 「関係志向」について有意差が認められた項目

	No.	質問紙調査結果			*p<.05 確率95%のt 1.986 df 93
		標本平均(前)	標本平均(後)	t値	
関係志向	14	2.500	2.734	2.137 *	関係志向8問合計 後-前 0.383 t値 0.983
	17	2.915	3.096	2.149 *	
	19	3.543	3.372	-2.141 *	

「関係志向」の8項目合計においては有意差が確認できなかったが、(14)「おうちの人や地いきの人は、あなたといっしょに勉強したがついていると思いますか。」(t=2.137)において有意差が認められた。これは、家族や地域住民等の人との関わりを大切にしながら学びたいという、児童の意欲の高まりが影響したと考える。また(17)「発表の時、自分の考えを分かりやすくみんなに伝えようと気をつけて話していますか。」(t=2.149)においても有意差が認められた。これは、自分たちが学んだ町じまんや学びの成果を、伝える相手として設定した保護者や友だちに分かりやすく発信しようという、児童の意欲の高まりが影響したと考える。いずれも、学習がStage 1、2からStage 3へと展開していく中で、「関係志向」に関わる構成者である保護者等による新学習支援が有効に機能し、本研究における児童の学ぶ意欲が向上した姿である「やる気をもって学ぶこと」、「学んだことを相手に分かりやすく伝えようとする」と結びついたと考えられる。

一方、(19)「がんばっている友だちをおうえんしたいと思いますか」に負の有意差(t=-2.141)が認められたことについては、第9回における全児童の自己評価平均値が4点満点中、全10回の自己評価平均の最低点である3.30点であったことが関係していると考えられる。この回の保護者からの発表評価カードと口頭でのアドバイス・励まし・評価の内容が、児童の発表方法の工夫を促すものが半数近くを占めており、直接、保護者からのアドバイス・励まし・評価を受け、しかも、改善点を指摘されたことが自己評価の低下につながり、自己改善を優先的に考えた児童が多かったためではないかと推測する。しかし、学習のゴールとして設定した第10回の自己評価の平均値は3.79点へと上昇したことから、保護者等による新学習支援が、「学んだことを相手に分かりやすく伝えようとする」と結びついたと推察できる。

なお、「充実志向」に関する4項目については有意差が確認できなかった。その理由としては、Stage 1からStage 2における地域人材による学習支援が、テーマや講話内容が異なるワンシヨッ

ト型の学習支援であったため、児童の興味・関心の違いにより学ぶ意欲に散らばりが生じたからではないかと考える。

(2) 児童の振り返りカードから

各児が記入した全10回分の児童振り返りカードを集計したところ、自己評価全体を通しての平均値は、4点満点中3.48点であった。この中で、学級担任のみで学習指導を行った回の平均値は、3.41点、保護者等の学習参加及び学習支援を得た回の平均値は、3.51点であった。これらのことから、保護者等による学習参加及び学習支援を得ることは、児童の学ぶ意欲の向上に少なからず効果があったと言える。

児童振り返りカードの自己評価欄の「がんばったことの原因」や、相互評価欄の「今日のキラリさん」の記述内容を見ると、Stage 1 からStage 2 にかけて、「しっかりメモができた」、「聞いたことを一つ残らず書いた」等、「書く」ことについて記述した児童の割合が増える傾向が見られた(図4)。児童の評価の観点が、ゲストティーチャー等の話を聞き漏らさないように正確に聞きとるといった「聞く」ことから、発表会に向けた資料作りのために、ノート等に自ら進んで正確に書き留めようとするなど、「書く」ことに重点が置かれるようになっている。

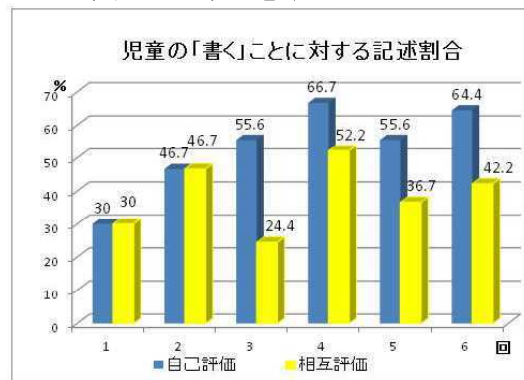


図4 児童の「書く」ことに対する記述割合

児童の振り返りカードの記述内容が、Stage 2 以降、「聞く」こと中心の記述から、「書く」こと中心の記述が増え、その内容も変化してきている例として表3に整理した。

表3 児童の振り返りカードの記述内容の変化

児童	Stage 1 (第1, 2回)の記述	Stage 2 (第3~6回)の記述
A児	少しだけ聞きのがしたことがあったから。	ワークシートがいっぱいになって、うらまで書けたから。
B児	話がよく聞けたから。	いっぱい書けました。うらまでいきました。
C児	話をよく聞いて、メモをちゃんと書けたから。	今日は、今までメモをしてきた中で一番いっぱい書けました。

Stage 1 からStage 2 に学習を進める中で、「聞く」だけでなく、聞きとったことを理解して正確に「書く」といった小学校3年生にとってより高度な学習活動へと、取り組む姿勢が変化していることは、学ぶ意欲の向上した姿である「より主体的に学習に取り組もうとすること」と捉えることができる。

(3) 非参与観察の記録から

筆者が学ぶ意欲の高まった姿として捉えた特徴的な児童の非参与観察の記録を表4に整理した。なお、下線部は、特に学ぶ意欲の高まりが感じられた部分である。

表4 非参与観察の記録

児童の変容の様子	
D児	自分が興味をもった事柄に関しては、今回招いたゲストティーチャーにもよく質問した。自己評価が低かった際の理由を、「寝てたから」「あくびをしていたから」等、悪びれることなく振り返りカードに記述していた。協調性が課題であったが、グループでの発表会練習に入ると周りの児童に、「もうちょっと声を大きく」、「早口になったらあかんで」等、積極的に声をかける姿があった。発信の工夫をする時間では、保護者の「ふらふらしない方がいい。」とのアドバイスをうなずきながら真剣な表情で聞いて練習に生かしていた。また、参観当日の振り返り際には、「 <u>〇〇さんはみんなをひっぱっているみたいだからすごい。</u> 」と、 <u>他者の努力を認める発言</u> があった。
	2年生の時や3年の1学期は、登校を嫌がる日があったそうである。その理由として、小さな妹に比重が移った母親の意識を自分に向けたいという気持ちが働いた(母親からの聞きとり…担任談)ようである。今回の学習では、母親が参

E児	観当日も含め5回参加した。しっかり見てくれているという満足感からか、その後は登校を渋ることは皆無となったそうである。菊畑の見学の際は挙手して「育てるにはどれくらい時間がかかりますか。」と質問し、答えをワークシートにメモしていた。発表会当日は、集まった評価カードに「紙が45枚集まった。」「いいアドバイスをいっぱいもらえた。」とうれしそうにしていた。担任談として、「2学期後半は、他の学習も前向きに取り組むようになった。」とのことである。
F児	プログラムの前半は、「なんもできなかった」、「あそんでいたから」等、振り返りカードに極めて消極的な記述が認められた。ゲストティーチャーによるスクリーンを使った講話の画面で、影絵遊びのいたづらをするこもあつた。担任が注意をすればやめるが、側を離れるとまた繰り返した。振り返りカードの自己評価は、ポスター製作まで、全て1(できなかった)であつたが、途中から、カードの記述が「88の手間をかけてお米を作っていることが分かつた」、「牛にゆうは1日に30リットル出る」等、学習内容を具体的に書くよう変化してきた。相互評価においても、無記入や「分からん」から、「発表げんこうをがんばって書いていた」、「大きな声で読んでいた」等、友だちの言を具体的に記述するようになった。発表の工夫の場面では、 <u>二輪菊の育て方の説明を、大きな声で真っ直ぐ前を向いて伝えようとする姿がビデオからうかがえた。この学習の自己評価は3点で、保護者のアドバイスに対しては4点満点の点数を書き込み、発表会のためとして「ふらふらしないこと」を掲げた。</u>
G児	書く活動に意欲的で、ワークシートや振り返りカードの記述が具体的でいいである。ポスターセッションの準備においては、グループの中心として、みんなに見出しの色遣いや文字の大きさ等をアドバイスしながら作業を進める姿が見られた。 <u>人前で発表することが苦手で、練習当初、声小さく聞きとりにくかつたが、学習参加の保護者からの「しっかり声を出して聞いてもらわなかつたら伝わらない。」というアドバイスを基に、声の大きさを意識して練習をし、発表会では、はっきりと届く声で酪農の仕事について発表した。G児の保護者からも、「この子なりによくがんばっていた」と評価する声がかかれた。</u>
H児	当初から、課題に対して真面目な態度で臨んでいたが、周りの児童の不真面目な言動に対し、必要以上に厳しく指摘するようところがあつた。菊畑の見学の後では、農家の人への感謝の言葉を綴った手紙を書いたり、プログラムの後半のポスター作りでは「自分のすることが終わつたら、人の仕事を自分から手伝っていた」と、友だちの行為を評価するよう言葉も聞かれたりした。発表練習では、声の大きさやクイズを出題する際の「間」についての指摘を受け、発表会では、友だちに「声をもう少し大きくした方がいいよ。」「もうちょっと待つて。」等の声かけをする姿があつた。

これら非参与観察の記録から、保護者や地域住民、周りの児童等との関わりを大切にしながら、意欲的に学び、共に高まっていこうとする姿が見られることから、本学習支援プログラムは児童の学ぶ意欲の向上に効果があつたとと言える。

(4) 児童の学ぶ意欲を高めた保護者・地域住民による学習参加及び学習支援

第10回を除き、延べ44名の保護者の学習参加及び学習支援を得た。

当初は、講義形式の授業への学習参加が中心であつたが、途中からは学習参加に加え、校外学習の補助、試食体験の補助、さらに、学習支援者としてより積極的な介入をお願いした。特に、第9回では、学習支援の保護者が児童の発表に対して、褒め言葉とともに気づいたところを指摘してもらうような場面もあつた。児童もそれらのアドバイスを吸収し、自分たちの発信スキル向上のための改善に努力した。

第9回の児童振り返りカードの「発表会に向けた課題」として、全児童の中で「声の大きさ」をあげた児童が47.3%、「発表の姿勢・態度」が29.0%、「スムーズな話し方」が10.8%であつた。これが、第10回の児童振り返りカードの「課題に対する振り返り」では、「声の大きさ」が34.4%、「発表の姿勢・態度」が3.2%、「スムーズな話し方」が1.1%と、いずれも数値が下がり、児童が意識した課題が改善された。併せて、自分たちの発表に対する「満足感・充実感」について記述した児童の割合が、9.7%から36.6%に上昇した。これらのことは、児童の発表が保護者等の新学習支援で改善され、聞き手により分かりやすい発表へと工夫した成果の現れであると言える(図5)。



図5 発表会の様子

6 おわりに

質問紙調査の事前事後の比較や振り返りカードの記録、児童の観察等を通し、学習が進む中で、

保護者等の学習支援を得てより積極的に学習に参加し、自分たちのまとめた町じまんを保護者等に発信しようと努力する様子が、より多くの児童に見られるようになった。ここに、「やる気をもって学ぶこと」、「学んだことを相手に分かりやすく伝えようとする」、「より主体的に学習に取り組もうとすること」への意欲が認められ、本学習支援プログラムの効果が検証された。

今回の研究によって、保護者・地域住民との連携・協働による効果的な学習支援プログラムを開発・実践することにより、児童の学ぶ意欲を向上することができるという研究仮説が支持されたと考える。

第3学年の2学期前半の総合的な学習を中心とした限定的な取組であったが、学習参加及び学習支援の保護者の学習支援プログラムに対する感想は、「子どもとともに地域のことが学べて勉強になった」、「年間を通じて保護者が学習参加のできる機会を計画に入れていただきたい」、「子どもの様子も見れてよかったので今後も参加したい」と、そのすべてが肯定的であった（資料4参照）。「子どもが家でよく話してくれるようになった」といった、家での児童の様子の変化に関する記述も見られ、学習支援プログラムが保護者からも支持されたと考える。

これらの声を生かして学習支援プログラムを更に改善するため、①見通しやねらいをより明確にした学習参加及び学習支援計画の充実、②個人情報の保護にも配慮した保護者・地域住民等への情報提供や協力依頼の方法の整備、③学習参加及び学習支援者との協力体制の確立等に取り組む必要がある。加えて、学習支援の地域人材や保護者等と事前打ち合わせを一層綿密に行い、児童の学ぶ意欲の向上に向けた意志疎通を図りながら、学習効果をより高めていくことが大切である。また、今回は取り上げなかったが、市川モデルの中で、「実用志向」をはじめとして他の学習動機の向上を目指した学習支援プログラムを開発・実践し、児童の学ぶ意欲の更なる向上につなげていきたい。

さらに、今後は、このような取組を他学年や他校に広げるために、保護者・地域住民等との連携・協働による児童への効果的な学習支援の在り方を積極的に周知する必要があると考える。

参考・引用文献

- (1) 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』p. 41
- (2) 福谷秀子（2000）「学びあう学習参加」（大瀬敏昭・佐藤学 編著）『学校を創る一茅ヶ崎市浜之郷小学校の誕生と実践一』小学館p. 181
- (3) 清水良彦（2012）「学校と保護者の協働一保護者の学校参加論の視点から一」九州大学大学院教育経営学研究紀要第15号p. 114
<http://www.education.kyushu-u.ac.jp/~motokane/assets/files/report/kiyou15.pdf>
- (4) 貝ノ瀬滋（2010）『小・中一貫コミュニティ・スクールのつくりかた一三鷹市教育長の挑戦一』ポプラ社p. 111
- (5) 春日市教育委員会（2012）『春日市発！コミュニティ・スクールの魅力』ぎょうせい
- (6) 市川伸一（2001）『学ぶ意欲の心理学』PHP研究所p. 48
- (7) 市川伸一（2014）『学力と学習支援の心理学』放送大学教育振興会p. 38
- (8) 辰野千壽（2010）『科学的根拠で示す学習意欲を高める12の方法』図書文化
- (9) 櫻井茂男（1997）『学習意欲の心理学』誠信書房
- (10) 佐藤晴雄（2011）『学校を変える地域が変わる一相互参画による学校・家庭・地域連携の進め方一』教育出版